

## 難波西鶴と

## 海の道

【12】

森田 雅也

前回は松前でタヌキがしくなった母の姿に化けて兄弟の前に現れ、弟に射殺されたという話を紹介しました。

タヌキ退治の話などは、北海道という遠く離れた場所だから、虚構で適当に作ったのでしょう。松前でなくても、どここの話でも良かったのではないかと考えます。

り、歴史上の有名な武将がムカデやヒトを退治する類いの話は全国に存在しますから、松前限定の話とは言えないのではないかと思います。けれども仕方がないでしょう。

## 狐狸に化かされる 「共通理解」利用

す。

例えば、「好色五人女巻二の二冒頭で「天満に七つの化け物ありてしてあげん、大鏡寺の前の傘火(からかさび)」「曾根崎の逆さま女」「池田町のわらひ猫」などの七つの怪異話は当時、天下の台所としてにぎわっていた天満に、実際に世間で広まっていた都市伝説だったのでしよう。

それを西鶴は「これ皆、年をかきねし狐狸の業ぞかし」と言い切っています。これは当時の多くの人々が、人間はたいてい「狐」や「狸」には化かされてしまふのだという、諦念に近い、共通理解を持っていたことを逆に利用したものと見える

の正体は古狸であったと言いつつ、都市に伝わる化け物の風評を「狐狸の仕業」と言っていることで、これは恐ろしくないと安堵感を与えているのです。

同じく、『西鶴諸国ばなし』巻四の「形は屋のまね」には、大坂道頓堀で上演中の当時は、大坂の井上播磨掾が、誰もいない深夜の芝居小屋で勝手に暴れていたという話をあげています。

西鶴が、大都会大坂のまったく根も葉もない怪奇話を作品化したとすれば大変なうそつきになります。第一、井上播磨掾に失礼な話です。

（ここでも西鶴は怪異部文学言語学教授）

そうすると、前回の松前の話も虚構では済まされたいでしょう。松前が大坂に近かったことは今まで書いてきた通りです。未開地というより都市伝説です。そう考えると、少なくとも母親の幽霊出現とその兄弟の退治程度の話は流伝していたのではないでしようか。

狸の話はカムフラージュだったので、(関西学院大学文学部文学言語学教授)

# カムフラージュして発信